
雲の上の世界

aki-yuzuriha

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雲の上の世界

【Nコード】

N2389W

【作者名】

aki-yuzuriha

【あらすじ】

明月ノ国、そこに住む一人の少女、如月。

過去の記憶を失い、それでも懸命に生きる彼女の生を支えていたのは、月の泉に現れた、一人の青年だった。

序 降りしきる雨の中で。（前書き）

初投稿になります。

まだまだ地盤のゆるい作品ではありますが、如月と共に頑張っ
て物語りを織り上げていきたいと思ひます。

序 降りしきる雨の中で

雲の上に行きたい。

前髪から滴るしずく。

ぐっしりと重くなった服。

目に入る雨水。

そして、胸から流れ出す血。

全て他人事のように感じる。

「殿……」

唇からこぼれ出る最期かもしれない言葉。

ああ……私はこんなに殿のことが好きなんだ。

そんなことを思っ、口元に浮かぶのは自嘲。

体を支えきれなくなっ、ずるずるとへたりこむ、その場所は。かつての育ちの家、その焼けあと。

何を、今さら。

そんなこと、ずっと前から知っていた。
そう、殿と出会ったあの日から。
如月はずっと殿の傍にいたのだから

序 降りしきる雨の中で。（後書き）

いきなりなにやらすごいところから入っていききましたが……。
如月に少しでも興味を持っていただけたら幸いです。

壱 純白の花（前書き）

如月と”殿”なる人物……。
これからどのように発展していくのやら。。。

壺 純白の花

森の中に用事がある、限られた人間しか通らない静かな森の小道。着物の裾をたくし上げて、腕にはいっぱいの真っ白な花、称華。如月は一心不乱に駆けていた。

涼しげな称華の香りに誘われるように、如月の口元に笑みがこぼれる。

（殿、喜んでくれるかなあ）

一ヶ月に一度の、殿との約束の日。

昨晩はわくわくしすぎてなかなか眠ることが出来なかったけれど、寝坊するようなことはもちろんなかった。

称華の花に顔をうずめるようにして如月はくすくす笑う。

（殿ならきつと、喜んでくれるよね）

心がつきつきして、足は羽が生えたかのようでくるくる動く。

「ほら、奈津。あと少しで街にでるよ、奈津はここで待ってて」

如月の言葉に、隣を走っていた如月の妹は、静かにその場に留まった。

「夜には帰ってくるからね」

そんな妹に微笑みかけて、如月は今度は街の大通りへと、ひた走る

「あら、如月ちゃんじゃない！　そうか、今日は月の君に会いに行く日だね？」

「あ、おばちゃん。こんにちは！」

一軒の店の前、如月に声をかけたのは、彼女と仲の良い織物屋の女将だった。

「まあまあ綺麗な称華なこと！　どうしたんだい、そんなにいっぱい抱えて」

彼女の扱う糸のように細い指で如月の髪を梳きながら、女将は少し不安げに眉をひそめたが、楽しみの絶頂にある如月はそんなことには気付かずに、頬を上気させて目を輝かせた。

「綺麗でしょう！　おばちゃんもそう思う？　これね、森に咲いていたの！　たまにはいつもと違う道で来ようとしたら、途中で奈津と見つけて、あんまり綺麗だから殿にあげようと思って」

女将は如月の言葉に目を丸くした。

「月の君に、さし上げるのかい？」

「うん、そくだよ、だって綺麗でしょ？」

にこにこ笑って如月が言う。それにつられるて曖昧な笑みを浮かべながら、女将は困ったような顔をした。

「そうかい。そうだね、綺麗だもんね。でもね、如月ちゃん、称華はあんまり縁起のいい花じゃ……」

「あ、そうだ！ おばちゃんにも一輪あげる！」

元気いっぱいにさしだされた称華を受け取って、女将はやれやれと笑った。

「まあ、この笑顔と一緒になら、ね」

「うん？ 何か言った？ あ、私もう行くね！ じゃあね、おばちゃん！」

「はいはい、気をつけて行くんだよ。月の君によろしくね！」

すでに走り出していた如月は上半身を捻って、女将に大きく手を振った。

嵐のように駆け抜けていった如月の、女将の手に残る置き土産を眺めて、女将は笑いながら小さく首を横に振った。

「さて、月の君はなんて言っただろうねえ……」

壺 純白の花（後書き）

称華は一体この明月ノ国ではどのような花なのか。
如月は”月の君”に花を渡して大丈夫なのか……。

次話もよろしくお願いします。

式 "月の君" 殿（前書き）

はてさて、称華をプレゼントする如月は……？
”殿”なる者の反応はいかに。。。

式 “月ノ君” 殿

「ほう、如月。お前は俺に死ねと言うのか」

殿の城”月ノ宮”の、小さな池のある裏庭。

いつも通りそこに通された如月は、縁側で座って待っていた殿に満面の笑みで持ってきた称華をさしだした。

あまり感情を表に出さない殿だけどきつと喜んでくれる、そう思ったのに……殿の口から出た意外な言葉に如月はただただ首をかしげた。

「へ？ どうして？」

殿の眉間にしわがよる。

「何故土産に称華を持ってくるんだ」

「綺麗でしょ？」

邪気の一片も感じられない笑顔で如月が言う。殿は溜息をついた。

「あんな、如月。称華は死者に手向ける花なんだぞ？」

「そうなの？ こんなに真っ白で綺麗なのに……」

如月は殿の隣に腰掛けながら不思議そうに称華に目を向ける。

「純白で綺麗だからこそ、だ。人々が死者を悼んで手向ける称華は、死者の道標とも言われている。」

死後の世界へ向けた長い旅、美しい称華は魔除けとなって、死者を”悪しきもの”から守る役目を果たすんだ。……如月には話したこ

となかったか」

「うん。初めて聞いた。じゃあ称華がないとどうなるの？」

「称華を持たない死者は”悪しきもの”に闇にひきずりこまれて、死後の世界へと着くことも出来なければ、そこからまた我々がいるこの世界に戻ってくることもできなくなる」

「そうなんだ……」

如月は改めて殿の手の中にある称華をまじまじと見つめた。

さつきまでただただ綺麗だった花が突然神々しく見えてきて、如月は称華を抱えていた腕をそわそわとこすった。

そんな如月を見て殿は微笑む。

「如月の腕がどうにかなったりすることはないから、大丈夫だ。これは後で父君と母君にでも手向けるとしよう。で、近頃どうだ、如月。森の生活に不便はないか？」

「うん、いつも通り、楽しく過ごしてるよっ」

ぱつと顔を輝かせてこーヶ月に起こった出来事を殿に報告しようとした如月は、ふと目を細めて殿を見つめた。

「殿、どうしたの？」

「うん？」

「元氣……ないね……？」

殿はふつと肩の力を抜いてやれやれと笑った。

「如月にはすぐにばれるな」

「何かあったの？」

「……ああ。如月、折り入って相談なんだが」
「なあに？」

殿は少し迷うようにじっと池を睨んでから、ぼそりと呟いた。

「お前、今いくつだ？」

「私の歳？ そんなのわかんないよ。殿だつて知ってるでしょ？」

私は……えーっと、そう、『みなしご』なんだつて」

「……そうだったな。とにかく、だ。お前が見た目から判断して俺と同じか少し下の十七だと仮定しよう。いい加減いつまでも森で暮らしてないで、都市に入って、人並みの生活をしたらどうだ」

殿の言い方は如月の気持ちを黒くした。

「なに、それ。私が人間らしくないみたいな言い方。私には私の暮らしが……」

「この”月ノ宮”で働かないか、と聞いている」

如月の言葉を強引に遮って、殿は言った。

「へ？ 月ノ宮って……この、殿のお城のことだよね？」

怒っていたことも忘れて首をかしげる如月。

「ああ。俺の宮で、働かないか？」

「ここで……？ 殿の、ところで……？」

「そうだ」

「……ずっと、ずっと殿の近くにいろの！？」

「今の生活に比べれば、そうだろう」

殿の返事を聞いて、嬉しさに舞い上がりそうになりながら、すぐにもやると言いかけた如月の脳裏にしかし、森の生活が思い浮かん

だ。

小さいけれど快適な、日当たりの良い小屋。

毎日一緒に走り回るたった一人の家族、奈津。

夜になると月をたたえる綺麗な月の泉。

その他にもたくさんある思い出の詰まった森。それらを全て捨てなければならぬ……。

如月は手足が震えるのを感じた。私はどうしたらいいの……？

式 "月の君" 殿（後書き）

殿からの提案に悩む如月。

果たして彼女はどんな決断を下すのか……。

しかしそれは少し先のお話。

次話では如月を傍目に、殿がメインで動きます。

次話もよろしく願います。

参 出会い？（前書き）

さて、如月の決断の前に、悩む如月の隣の殿メインにお話がまわります。

これは二人の出会いのお話、その前編。

参 出会い？

殿 もとい夜光やこうは、顎に手をあてて考え込んでいる如月の姿を静かに見守っていた。

夜光にとって、出会った当初は少女であつた如月が娘へと成長することは、喜びであると同時に、不安なことでもあつた。

くるくるとよく動く大きな目、ほっそりとした面立ち、決して身長は高くはないが、森で鍛えられたすらりとした手足。

如月は客観的に見ても美人だと思う。

そんな娘が人気のない森の中、一人で生活をしているのだ。心配にならないはずがない。

しかし、今の如月との関係を壊したくないという思い、そして森に住む如月があまりにも楽しそうであること、さらには宮に如月を縛り付けることの後ろめたさが、如月に宮仕えの提案をすることを妨げていた。

如月は悩むだろう。実際今もこうして難しい顔をして考え込んでいる。

だからこの話を持ちかけるのは嫌だった。

それでも

如月に出会ったのは五年ほど前、月の半分欠けたある夜だった。

夜光という名前は、現明月ノ国の王である兄の耀映ようえいと対でつけられたものだ。

昼の間は耀映がこの国を守り、夜になれば夜光が守る。そんな両親の思いが込められた名前だった。

いつしか国民は耀映の事を”陽の君”、夜光の事を”月の君”と呼ぶようになった。

他人がどう思っているか知らないが、夜光にとって、己の名がさす自分の道は延々と兄の日陰であり、生涯兄を支えていかなければならない宿命を負ったものだった。

あなたは暗闇でも光る光。もし耀映が道を踏み外して闇に迷ったら、あなたが進むべき道を照らすのですよ。

父王に続いて流行り病に倒れた母が、亡くなる前によく口にしていた言葉だ。

だから、自分の道が日陰であることは気にしないようにしていた。王弟となったからには、しっかりとその責任を果たしていかなければならないという気負いもあった。

ただ、どうしてもやるせない気持ちになることがある。

そんな時、夜光はよく月ノ宮をこっそり抜け出して、森の中の月の泉に出かけた。

静かな湖面。何が起きてもここだけは、いつまでも夜光のことをそっと包み込んでくれる。そんな気持ちになれる、大切な場所だった。

あの日も、そうだった。

陽ノ宮から月ノ宮にわざわざ訪れて、夜光にさんざん机仕事を押し付けた後、兄は隣国の王と楽しそうにどこかに出かけてしまった。

もううんざりだ。

久々に心からそう思った。絶対に兄よりも自分のほうがこなしている仕事量は多い。それなのに、世間で評価されるのは兄ばかり……。

気付くと月の泉に足が向かっていた。

森に足を踏み入れると、精気溢れる木々に包まれ、夜光はすう……と胸の中のわだかまりが薄まっていくのを感じていた。いつもと同じ、静かな森。

しかし、少し歩いて、木々の間からきらきらと月の光を反射して光る泉が見えてきたとき、ごそごそと泉のほとりで動く人影を夜光の目が捕らえた。

さつと身構えて、素早く空に目を向ける。

半月はもう大分傾いていて、人が泉にいるような時間では……決してない。

「そこにいるのは誰か」

腰にある刀に手をかけながら厳しい声を出す。

泉のほとりの人影はびくりと体を震わせてから、恐る恐るといった体で夜光のほうを見た。

参 出会い？（後書き）

ようやく”殿”の名前が出せました笑

夜光さん、個人的には結構気に入っている名前です^^

大切な場所への闖入者、夜光はこれからどうなるでしょう……？

次話もよろしく願います。

四 出会い？（前書き）

前編といいながら結局前回出会わなかった夜光と如月…… ^^ ;
今回は後編です。

四 出会い？

「だあれ……？」

夜光は目を見開いた。

帰ってきたのがあまりにもかばそい、少女の声であつたから。

「娘……か？ こんな時間にこんなところで何をしている」

驚きから立ち直って、それでも警戒は怠らないようにしながら、夜光はすたすたと少女の方へと歩き出した。

少女は両手を胸の前で握り合わせ、きょどきょどと落ち着きのない動きをしながら小さく返事をした。

「えっ、えと、その、奈津がいなくなっちゃったから……」

「奈津？ 友人か？」

少女の顔がしっかりと見えるところまで行つて夜光は立ち止まる。少女がいつそう身を硬くするのが分かった。

「……家族」

「そうか、家族か。こんな時間になつて見つからなければさぞ心配だろう。手伝つてやるうか？」

夜光が手を差し伸べると、少女は怯えるように一歩後ずさつた。

「あ、こら、馬鹿……！」

「え？ あれれ？ うわあっ……！！」

そして、派手な水しぶきを上げて、彼女は泉に落ちた。

少しして夜光に引つ張りあげられた少女は、夜光が貸した上着に包まりながら、夜光と並んで座って、縮こまった。

「お前、名は？」

「……如月」

「如月？春の名だ」

「うん」

「何故このような所に住んでいる？」

「知らない。覚えてない」

「お前……。家族は？その奈津とやらが、いるのだろう？妹か？」

「うさぎ」

「……」

「うさぎの奈津。私が付けた。女の子だから」

「……そうか」

何とも言えない沈黙が流れて、結局一言三言交わしたところで『奈津』が如月の元へと帰ってきたため、そのまま如月とは別れた。ただ、月ノ宮に戻った後も妙に気になって、数日後、夜光はまた泉に出掛けた。

そしたら、いた。

如月が。奈津と一緒に。

「如月」

驚かせないように、ゆっくり声をかけたのに、如月はビクッとしてから慌てたように振り返って見開いた目で、夜光を見た。

「……来たんだ」

「……お前こそ、来てたんだな」

「うん。……また来るかなって、思ったから」

それから、夜光は満月の夜、泉に通うようになり、如月は夜光といるとき段々笑うようになった。

そんな穏やかな日が続いていたある日。

月に一度、美しい光を泉へと注ぐ月が満ち満ちている夜。

それなのに、いつまで経っても如月が来ない。

不安に思ったが、如月の小屋まで行くのは少し躊躇われて、夜光はじっと待っていた。

しかしあまりに遅いので、小屋へと向かって歩き出し……森の中で倒れている如月と、その傍らで不安そうに駆け回る奈津を見つけたのだ。

燃えるように熱い体でぐったりとした如月を慌てて月ノ宮まで連れ帰った。原因はただの風邪のようだが、なにか悪いものが体に入り込んだらしく、生死の境を彷徨うほどの重態となっていた。

しかしなんとか如月は持ち直し、夜光が忙しくなったこともあって、それを機に今度は如月が月一で月ノ宮を訪れることになった。

立派な一国民である如月の安否確認、ということで月ノ宮内にも話は通した。

夜光の身分がこの都の王弟である事を知り、夜光の家が月ノ宮だということが分かったときには如月も驚いている様子だったが、もうすっかり夜光に慣れてしまった彼女が今更夜光に敬語を使う事もなかった。

最初の方こそあまりいい顔をしなかった宮の人間も、如月の人当た

りの良さが幸いして、今ではすっかり如月と仲良くなっていた。

こうして、如月が夜光の元へと通う日々が新たに始まったのだった。

四 出会い？（後書き）

こうして、夜光と如月の物語は幕を開けます。
そして次回ようやく話が戻り如月の決断の時……。

次話もよろしくおねがいます。

伍 如月の選択（前書き）

ふう。

ようやく如月にお話は戻ります。

彼女の選択は一体……。

伍 如月の選択

夜光は目の前で悩みに悩んでいる如月を見て、静かに溜息をついた。できることなら、あまり困らせたくは無い。

それからしばらく頭を抱え込みそうな勢いで考えていた如月だが、ようやく決心したように、顔を上げた。

「……殿、ごめん。私やつぱり森で今まで通り生活する。あそこは私の家だから」

如月の目にははつきりとした意思が宿っていたがしかし、内心ではやはり心配だった。

折角殿が誘ってくれたのに、断ったりして、嫌われないかな……。

「そうか」

しかし、そうやって答えてくれた殿の目はいつもと同じ色をしていて、静かに如月の頭をなでてくれた。

「お前がそうやって言うなら、無理強いはいしない。ただ、お前の席は空けてある。気が変わったら、いつでも来い」

目を見開いて、まじまじと夜光の事を見つめてから、如月は飛びっきりの笑顔でうなずいた。

「うん……！」

「如月、もう帰るのか？」

それからいつものように一ヶ月の間にあった楽しいことを話してから夜光と別れ、幸福感に包まれて足取りも軽く宮を出ようとした如月を、優しい声が引きとめた。

「あ、耀映様……」

夜光の兄であり、この明月ノ国を統べる耀映が、如月はあまり好きではなかった。
どこがどうとは言い難いが、如月にとっては一緒にいたいのはあくまで殿であり、耀映様ではないのだ。

「うん。もう帰るところだよ？」

こうして普通にしゃべっていたら、一度宮の人に怒られた事がある。『敬語』を使いなさいと言われたのだが、如月にとってそれは異国の言葉に等しく、全く理解できないものだった。

如月が敬語を知らない事を知り、ならば耀映様や殿とは金輪際言葉を交わすなどと言われ、如月が焦っていたときに、耀映様は別に構わないと言ってくれたのだ。

（悪い人ではないんだけどなあ……）

何故耀映様が自分は好きになれないのか、如月は首をかしげた。

「如月、夜光の元で働かないか、と言う話はもう聞いたんだろっ？」
「うん。聞いたよ」

「じゃあ、お前はこの宮に住むことになるのか？」

「え？ ううん。住まないよ」

あっけらかんとした如月の言葉に、耀映は意外そうに顎に手を当てた。

「……？ もしかして、お前、夜光の話を断ったのか？」

「うん」

「……そうなのか。私も如月と一緒に暮らせると思って、期待していたんだがな……」

「ごめんね、耀映様。でも私はやっぱり森が大事だし、奈津もいるから」

「ああ、そうだな。如月は如月の大事なものがあるもんな。夜光が引き止めなかったんだ、私が引き止めるわけにもいくまい。さあ、もう帰りなさい。遅くなってしまう」

「うん。ありがとう、耀映様」

今日の耀映様がなんとなく優しい事に、如月は喜びを覚えて、にっこり笑って耀映に背を向けた。

殿には頭をなでてもらったし、耀映様は優しくかったし、あんまり幸せだったから、如月はその夜に、とんでもない事が起きるなんて、思っていなかった。

伍 如月の選択（後書き）

この夜にとんでもないことが起こるそうです。

如月が選択した森での平和な生活は一体どうなるのか……。

次話もよろしく願います。

六 恐怖の夜（前書き）

森での生活を選び取った如月。
しかしその夜、大きな出来事が……。。

六 恐怖の夜

「それでね、殿の宮で、殿の傍で働かないかって、殿が言ってくれたんだよ？ すっごい嬉しかったんだけど、奈津もいるし、私はこの森が大事だから、断っちゃった。でも殿も、あ、そうそうそれから耀映様も今日は優しくってね？ 殿は私の頭をなでてくれたし、耀映様も優しい事言ってくれたよ」

「……」

如月の膝の上で、奈津は気持ちよさそうに目を細めて丸まっている。如月はそんな奈津をなでながら、今日あった出来事を報告していた。穏やかで、悪いことが起こるなどまったく思いもよらない、いつもと同じ静かな夜。

しかし、そんな優しい静寂が、今夜ばかりは続かなかった。

一日の報告を終えて、奈津を膝に乗せたまま、如月がうとうとまどろみ始めたとき、奈津が突然びくんと体を震わせて、立ち上がったのだ。

「あれ？どうかしたの、奈津……」

寝ぼけながら、如月が最後まで言うか言わないかの内に、粗末な小屋の外で鳥が騒ぎ始めた。

「え？ なに……？」

嫌な予感に眠気は飛んで、心臓がきゅうつと縮まる。不安に駆られてそつと奈津を抱き締めた。

そうして少し待ってみたが、鳥が落ち着く気配はない。

とうとう何が起きているのか気になって、そろそろと動いて、窓代わりに小屋に開けている四角い穴に取り付けた木の板をどけた。

しかし間の悪い事に今夜は新月。外は闇に閉ざされていて、何も見えない。

ただしわがれた声でしきりに鳴き、ばたばたと羽を動かす鳥達の音だけがあたりに響いていた。

（何があつたんだろう……）

と、ふわりと風が舞い込んできて、小屋の中の蠟燭を吹き消した。

奈津が怯えた様な声を出して、するりと如月の腕を抜け出す。

「あ、こら奈津……！」

さっきまで明るかったため、如月の目はまだ闇に慣れない。外では鳥達がいつそう大きな声で騒ぎ始める。

（何が、起きてるの……？）

戸惑う如月の耳に突如、ざくざく草を踏み分ける、乱暴な足音が聞こえてきた。

「なに……何なの……？」

恐怖にかられて、如月は小屋の隅で頭を抱えてうずくまった。

どうしてだろう。こんなことが前にもあつた気がした。近づいてく

る怖い足音。私はどうしようもなくて……。

（殿……）

ばたんっ

乱暴に扉が開いて、二、三人の足音がどたばたと小屋に踏み込んでくる。

ぎゅっと目を閉じて、如月は自分自身を抱き締めた。

「なんだあ、この小屋は？ 真っ暗じゃねえか」

「やつぱこんなところに金目のモンなんかねえって。とっとと城下町まで行こうぜ？」

「折角明かりが見えたと思って、仲間からこっそり外れて、こんなとこまで来たつてのによお……」

低い男の声。

粗悪な言葉遣い。

荒々しい足音。

間違いない。この人たちは、前に殿が言ってた気をつけないといけない人たちだ……。

恐怖が喉元までせり上がってきて、如月は必死で口元を押さえた。

「まあ、そう急くなよ。一応は人間が住んでそうな小屋なんだ。探したらなんか出てくるかも……ってうわ！」

「どうした！」

「いや、何かが俺の足下を通ったような……。明かりつけようぜ」

（奈津……。隠れなさい……。！）

如月は必死に念じた。このままじゃ……。火打石の音が何度かした後、小屋の入り口の方で、明かりが灯った。如月は一層身を縮こまらせる。

「さあて、よく見えるようになった。さっき通ったのは……なんだ、うさぎじゃねえか」

男の声を聞いて、如月は思わず顔を上げた。

小さな机の影から、ちらちらと蠟燭に照らされた男の顔がはつきり見えた。

一人はげっそりとやせていて、そのくせ異様に髪が長い、かなり人相の悪い顔。

二人目はもじやもじやと髭を生やして、丸々とした顔をしている。三人目は、話には聞いた事があるけれど、本当にこんな人がいるんだ、と感心してしまいそうなほど、見事に頬に醜い傷跡がある男。

「まったく、びっくりさせやがってよ！」

髭の男が乱暴に何かを蹴り飛ばして、鈍い音がした。どさりと如月の目の前に投げ出されたのは

「奈津……。！」

思わず声をあげる。打ち所が悪かったのだろうか、びっくりとも動かない。

「奈津、奈津……。！」

抱き上げても、身じろぎもしない。その手足はぐったりしていて、全く力が感じられない。

「奈津……」

抑えようもなく涙が溢れ出した時、如月はぐいと左腕を引かれ、無理やり立たされた上に、小屋の壁に押し付けられた。如月の腕から零れ落ちるように奈津が床に投げ出される。

「あつ……」

如月の顔に恐怖が甦る。すっかり忘れてた、この男達……。

「まさか、こんな美人の姉ちゃんがこんな小屋に住んでるなんてなあ？」

如月を壁に押し付けた顔に傷がある男が下卑た笑みを浮かべて、如月の腕を捻りあげた。

「いつ、痛い……！ 痛いって……！」

「そりゃあ、痛くなるようにやってんだから痛くないと意味ねえだろ」

「へえ、こいつはホントに美人だなあ」

「なあ、順番決めようぜ、順番」

男達がよく分からない事で騒ぎ始めた。

戸惑いと恐怖と苦痛を顔に浮かべた如月を見て、如月を拘束している男が、如月の耳元に口を寄せる。

「なあ、痛いかな？」

「痛いってば……！ 放してよ！」

「放すかどうかは、お前次第だな」

「私……？」

「そうだ。俺が放したら、俺の言う事ちゃんと聞くか？」

「そんなの……聞けないよ……！」

痛みに目に涙を浮かべながら、如月は必死で反抗した。

「聞けないのか？ じゃあ、こっすらするまでだ」

ぎりぎり、と嫌な音をたてながら、男は如月の腕を更に捻り上げた。

「いやあああつっ！」

如月の壮絶な悲鳴に男達がたまらないといわんばかりにげらげらと笑う。

「い、痛っ、放してってば！」

「俺の言う事聞くんだな？」

「聞くよ！ ちゃんと聞くから放して！」

にやりと笑って男が如月を開放すると、改めて如月の目から涙が溢れ出した。

「ああー、いいよな。やっぱ美人の泣き顔はそそるよな」

「まあ、このお嬢さんは言う事なんでも聞くって約束してくれたかな。焦らなくても大丈夫だろ。で、お嬢さん、まず名前を言ってもらおうか？」

「……如月」

涙をぬぐいながら、ぼそりと答える。

「へえ、随分しゃれた名前してんだねえ。そんじゃあ如月。俺たちは腹が減ってたんだ。なんか美味しいもん作れ。そうだな、うさぎ鍋なんてどうだ？」

げらげらと笑い声が響く。如月は頭がくらくらしてきた。何を言われているのかわからない。

戸惑う如月の目の前で、一人の男が奈津を無造作に掴みあげた。

「ほら、材料ならここにあるじゃねえか」

あまりのことに如月は目を見開いた。

「そんな……！ できないよ……。だって奈津は……」

言った途端にそれまで笑っていた男達の目が冷たい刃のように光った。

「できないだあ？ 何でも言う事聞くんじゃないのか？ さっきより、もっと痛い目にあわせてやってもいいんだぜ？」

がたりと詰め寄る男に、如月は手を合わせた。

「お願い、お願い。奈津だけはやめて。私の家族なの」

「家族？ ただのうさぎだろ。しかももう死んでんじゃないか。俺も生きてるヤツを殺せって言ってるわけじゃねえんだし」

如月は男の手の中でぶらぶらと力なくゆれる奈津を見つめた。奈津はもう動かない。そのことをかみ締めた途端に、がくりと如月の膝

から力が抜けた。

「お願いだから、奈津だけは……」

ぺたりと床に座り込んだまま、次から次から出てくる涙をぬぐいもせずに、如月は懇願した。

「へえ、じゃあお前がうさぎ鍋の分まで働くんだな」

「奈津が助かるんなら、何でもするよ……！」

その言葉を聞いた瞬間、男の顔には残忍な笑みが浮かんだ。

「じゃあ何が起こっても文句は言うなよ」

そう言うやいなや、男は如月の帯に手をかけた。

「な、何……？」

如月が状況を把握する前に、帯が解かれてはたりとおし倒される。

「な、い、いやだよ……！」

如月の叫びも虚しく、男が如月の腕を抑え付けて着物の衿に手をかけたその時、ばたんと扉が開く音と、男達の怒声、そして真っ赤な血の色を見て、如月は意識を失った。

六 恐怖の夜（後書き）

一気に進んでしまいました。

果たして如月は無事なのでしょうか……。

次話もよろしく願います。

七 悲しい現実（前書き）

小屋にて氣を失った如月。

果たしてそれからどうなったのか……。

七 悲しい現実

「殿……殿……助けて……」

「如月？」

「殿……」

「……」

大きな手が額に置かれたのを感じて、如月はまどろみから目覚めた。

「目が覚めたか？」

如月のぼんやりと宙を見つめるようなうつろな視線が、夜光の顔の上を滑っていく。

「如月？」

夜光の呼びかけに、ようやく如月の焦点は夜光の上に留まった。

「殿……？　なんで……」

ここにいるの？　と聞こうとして、如月はふとあたりを見渡した。私の小屋じゃない……ここは、殿の宮だ……でも、なんで……。考えようとした時、頭に鈍い痛みを感じた。何か、とてもいやな事が起きた気がする……。そう、なんだかとても、辛くて悲しくて寂しい夢……。

如月の手は無意識のうちに殿の手を求めてさまよっていた。

夜光がゆっくりとその手を取る。その温かさに安心して、如月の口からは自然と言葉が滑り出した。

「殿……私、すっごい怖い夢、見てたんだよ。奈津が死んじゃってね、私もなんか大変な目にあつとこだったんだ。あんなに怖い夢、初めて……」

ぼんやりと、まだ夢の中にいるかのような顔で話す如月を、夜光は眉間にしわをよせて見つめた。

言いにくそうにして何度か躊躇うような素振りを見せてから、夜光は溜息をついた。

「如月。それは夢じゃない。現実起こったことだ」

如月の顔に不審げな表情が浮かぶ。

「……？ げんじつ……？ ゆめじゃ、ない……？」

鸚鵡返しに夜光の言う事を繰り返す如月。夜光は静かに頷いた。

「そうだ」

じわじわと目を見開いてから、がばつと如月は起き上がった。

「……っ、じゃあ奈津は？ 奈津も死んじゃったの……！？」

「……ああ」

「あれが、現実……？ 奈津も、もう、いない……？」

「ああ」

「そんな……。私……私は……」

夜光の手の中で、如月の手がわなわなと震えているのが分かる。如月はもう片方の手で顔を覆った。

「嘘……嘘……！」

「如月、昨晚お前の小屋は……」

「聞きたくない！」

激しい拒絶と共に、如月は夜光の手を振りほどいた。

「聞きたくない！ 私には、聞けない……！」

「如月……」

「お願い、殿。駄目。一人にして……」

「……」

気遣わしげに如月を見ていた夜光は、しかし、黙って如月の元を離れ、部屋を出た。襖を閉めた夜光の背に、如月のうめき声がのしかかった。

「奈津……」

夜光のいなくなった部屋で一人、如月は今更痛み出した捻り上げられた腕を抱くようにして、大声で泣いた。

七 悲しい現実（後書き）

大切なたった一人の家族、奈津を失った如月。
それでも彼女はひたむきに前へと進み続けます。

次話もよろしくお願いします。

八 如月のこれから（前書き）

あの夜、起きた事件の真相は……
如月はこれから……

八 如月のこれから

「こんなところにいたか、如月」

「あつ、殿……」

夜光の姿を見て、縁側に座っていた如月は決まり悪そうな顔をした。いつも夜光の前ではにこにこ笑っていた如月だ。

そんな表情が新鮮なようで、痛ましくて、夜光はひそかに眉をひそめた。

「さつきは、ごめんね……耀映様があの後私が落ち着いたらあの日の事、話してくれてね。殿が私の事助けてくれて、奈津のお墓も作ってくれたんだよね。ありがとう」

静かに話す如月は、最後に少しだけ笑うと、視線を外に戻した。

如月が耀映に聞いたあの日の事件の顛末はこうだった。

誰もが次の日に備えて寢床につく時間。大きな盗賊団が都に入り込んだ。

都に侵入するまでは鮮やかな手並みだった彼らだが、それからどうするかで内輪もめが起きて、あっさり都の警備兵に捕まえられた。皆が何事もなく良かったと安心する中、盗賊団が辿ってきたルートを聞いた夜光は嫌な予感がして、一人如月の小屋へと向かった。そうしたら、やはり、盗賊団の一味が如月の家に入りこんでいた。夜光は躊躇わず彼らを斬ったらしいが、その時の争いで、如月の家は燃えてしまった。

「……何を見ていた？」

如月の隣に立って、夜光は問うた。

「空」

呟くように、如月は答えた。

「……」

「この時間のね、太陽が傾き始めたぐらいの空には雲がたくさんあってね、私が見える下のところは暗い色してるくせに、上の部分はすごく綺麗な白色なの。だから、私はずっとあの雲の上に行きたいって思ってた。自由にあの上を飛んでみたいって。……奈津が先に、行っちゃったけどね。もともとうさは私よりは長生きできないって耀映様は言ってたけど。きっとあの綺麗な世界で奈津は……」

「……」

「私の大事なものだよ。奈津と殿の次に、私の大切なものだったの。だから、今は、奈津もいるこの空と殿が、私の一番大事なもの」

「……そうか」

それからしばらく黙って二人は空を見上げていたが、如月が空を見たままぼつりと語りだした。

「殿……、どうしよう。私、もう帰るところがなくなっちゃった……。奈津がいない森には、住みたくないんだ……。街の人に助けてもらおうかな。どこか私を雇ってくれるような家、殿しらない？」

殿は空から視線を外し、じっと如月を見て、それからぼそりと呟いた。

「ここで、働けばいい」

「え……？」

「……昨日も話しただろう。ここで、働かないか？」

少し考えるように如月は目を細めた。昨日……そう。昨日。殿に会いに来たのも、盗賊が如月の家に入り込んだのも、全て昨日のことなのだ。

昨日のこの時間はまだ、奈津は生きていたのに。

「昨日……。殿のそばで働けるってやつ？」

「ああ」

如月の目が、空を見つめ続けるその目が、ゆらりと揺らいだ気がした。

少しの間じつと押し黙った如月は、やがてその目を夜光に向けた。

「……ねえ、殿。知ってると思うけど、私本当に何も出来ないんだよ？読み書きも基本しか知らなくて、殿が教えてくれて、やっと人並みに出来るようにはなったけど……。それに、いきなり私なんかをそんな宮に置いちゃったら、なんていうか、その……殿は大変なんじゃない？」

殿の傍にいたい。

しかし、如月は何となくそれがいけないことのような気がした。

前、殿に同じことを提案されたときは全く実感が湧かず、だからこそとても悩んだけれど、いざ本当に殿の傍で働くとなると不安は押し隠せなかった。

「仕事は少しずつ覚えていけばいい。それにお前は宮のなかで顔は知られているから問題ない。兄上もこのことに関しては了解してくださっている」

「でも……」

「お前は、俺の傍で働くのが嫌なのか？」

夜光の問いに如月は激しく首を振った。

「嫌じゃない！ 嫌なわけ……ないよ……」

「なら」

「簡単に言わないでよ！」

とうとう如月は叫んだ。殿の事をキツと睨むように見つめて、その目に一杯の涙を溜めて、唇を震わせて。

「私は何にも知らない。何にも分からない。細かいことは分からないけど、でも、私、私は……」

「如月……」

如月の心を覆い尽くしていく、今まで感じたことのない感情の奔流。こらえきれなくなった涙が、頬を伝う。

「私は、今自分がどうしたいのか分かんない。あんなに、あんなに殿の傍にいたいって、そう思ってたのに、どうして、こんなに、迷いばかり……」

ぼん、と殿の手が　いつもの殿の手が、うつむいた如月の頭の上に置かれた。

「好きにしたらいい。ただ、一つを選択肢として、俺の傍で働くと

いう事も、考えておいてくれたらいい」
「……うん」

殿の大きな温かい手が、如月に安心感を与えた。大丈夫。ちゃんと考えて、決めればいいんだ。そんな風に思えた。

「夜光、如月。ここにいたか。探したぞ」

「兄上」

「耀映様……」

如月の涙も乾いて、また二人、空を見上げていた時、ふとそこに姿を見せた耀映の前に、夜光の顔つきがきゅっと締まるのを見て、如月は少し目を伏せた。

「どうかされましたか。兄上が月ノ宮のこんなところまで直々に珍しい」

「如月相手に客が訪れてな。なかなか見つからないから私も搜索に参加していたんだ」

「如月に客……ですか？」

ちらりと夜光は如月に目を走らせた。如月も全く心当たりが無いように首をかしげている。

「私に……？」

「ああ。如月に、だ。会ってくれるな？」

少し不安ながらも、誰かが自分に会いに来るなどという事が今までなかった如月は好奇心を掻き立てられた。

こくりと如月がうなずくを見て、耀映は彼女の手を取って立たせた。

「かなり身分の高い方々だが……。訳ありでな」

「偉い人……？」

「ああ」

陽ノ宮へと向かう耀映の後に続いて歩き出した如月の後に、夜光は続いた。

そして頭一つ分身長の違う如月には聞こえないように、そっと耀映の傍によって囁いた。

「訳ありで、高貴なおつしやいましたが、そんな方々が如月に用事なのですか？」

耀映は機嫌よく笑った。

「面白いことになりそうだぞ。……お前も一緒に会ってみるんだな」

「……面白い事？」

独り言のような夜光の反問には何も答えず、耀映は如月の前をさつさと歩いていってしまった。

再び如月に視線を戻し、夜光は微かな不安に駆られた。

何か、今までの日常がいきなり砂漠の陽炎のように不確かになって

しまったような、そんな……。

八 如月のこれから（後書き）

一度事が起こると、ドミノ倒しのように様々な事が起きたりしますよね。

如月の人生の岐路に、さらに何かが起ころうとしています……。

次話もよろしくお願いします。

九 訪問者（前書き）

夜光が感じた日常の危うさ……
如月の訪問者とは一体？

九 訪問者

「耀映様が直々に探してくださったのですか。申し訳ございません」

耀映の宮　陽ノ宮の応接室、両手を畳につけて深々と頭を下げた客人二人に、耀映はひらひらと手を振った。

「いえいえ。このぐらいは。ところで如月は今愚弟と親しくしているので、奴も同席させたいのですが、よろしいですか？」

「弟君とおっしゃられますと、夜光殿ですか？　……それは光栄でございます」

「如月、夜光。入れ」

するすると静かに襖が開き、夜光に倣って如月も深々と頭を下げた。夜光が合図してくれるのを待つて、期待に満ちて顔を上げた如月は自分に会いに来たというその人達を見つめた。

大人の男の人と、女の人だ。耀映様や殿に比べて大分年上に見える。本当に偉い人たちみたいで、座っているその姿勢が、一般人のそれとは違う。

男の人は黒色の着物と袴をびしっと着こなしているし、女の方は、如月の着ている単とは比べ物にならないほど美しい、柔らかい桃色の訪問着がとても似合っていた。

こんな人達が自分に一体何の用があるのか、如月は再び首をかしげた。

だから、そんな偉い人たちがまじまじと穴が開きそうなほど自分をじっと見ていることに気づかなかった。

「これは……鋭空殿に、咲殿でしたか。遠路はるばるよくおいでく

「ださいました」

夜光が驚いたように声をあげるのを聞いて、如月は少し安心した。殿も知ってる人ならきつと大丈夫。

「覚えておいってくださいましたか。お久しぶりでございます。随分とご立派になられたことです」

なんとか如月から目を離れたといった風体で、男の人のほうが夜光の挨拶に答えた。

耀映に手招きされて部屋に入った如月は夜光のとなりにちょこんと座って、自分に会いに来た人たちと改めて向かい合った。

再びまじまじと見られることになった如月は最初の物珍しさが過ぎると居心地が悪くなって、視線を落として、もぞもぞと動いた。

「佳代……」

僅かな間のあと、女の人がぼそりと呟いた。

「佳代……でしょう？ 佳代、佳代……！」

「こら、咲……」

女の人がすごく必死そうな声を出している。

佳代とは誰の事だろう……。

如月は不思議に思ったが、何となくそれが自分に向けて発せられている言葉かもしれない気がして、ちらりと女の人のほうを見た。

女の人は如月の方に身を乗り出して、懇願するような顔をしていて、如月はすぐにまた目を伏せるつもりだったのにその顔から目が離せなくなった。

きつとこの人が言ってる佳代って、何故かは分からないけど自分の事なんだ、という思いが胸の底にすっと落ちた。

「落ち着きなさい、咲。まだ紹介にも預かってないだろ」

「でも、鋭空様、この子は……！」

「物事には順序がある」

強い口調でたしなめられた女の人　咲様は渋々居住まいを正した。

「無理ありませんよ、鋭空殿。咲殿を責めないでください。では少し遅れましたが。」

如月、こちらは私達とは同盟関係にある　つまり私達の国と親しくしてくださっている葉華^{よつか}国の皇帝と皇后様だ。お名前を鋭空様、咲様とおっしゃる。

馬車でも一ヶ月はかかる、遠い国の方々だ。鋭空殿、咲殿、こちらが『如月』です」

耀映様が紹介してくれて、如月は驚くというより納得した。そうか。皇帝と皇后様なら、それは殿や耀映様と同じような雰囲気をもっている事だろう。

鋭空様が如月に優しい笑みを向けてくれる。

「如月さん。いきなり押しかけてすまない。驚いただろう」

「あの、えと……そ、そんな事ない……」

実際声をかけられるとどうすればいいか分からなくて、如月はそつと夜光のほうをうかがったが、夜光ははちつとも如月の方を見てくれなかった。それどころか、夜光のまとう空気がいつもよりすこし冷たい気がする。

そんな夜光が何となく怖くて、如月は慌てて言葉を紡いだ。

「あ、あの、皇帝様と皇后様が私に用事って……」

「あ、ああ。そうだな気になるな。ではいきなりで悪いんだが、少し君自身の事について話してくれないか？　いつからこの国にいるんだい？」

どうしてこんなに偉い人たちが、如月の事についてなんか、興味があるのだろうか？　多少疑問に思いながら、如月は語りだした。

「私の事……？　え、えと、私は気づいたときにはもうこの国の森で暮らしてたの。長い間一人だったけど、たまたま罫にかかったうさぎの奈津を拾ってきて、それからずっと二人で……」

奈津の事を思い出して、如月は目を伏せた。涙がこぼれてしまいそうだった。

「耀映殿に伺ったよ。怖い目にあっただってね。奈津のことも気の毒だった」

心底如月を思いやってくれているような声に、如月はぐっとこみ上げてくるものをこらえてうなずいた。

少し間を持つてから、鋭空が再び口を開いた。

「不思議に思ったことがあるんだが、聞いてもいいかい？」

再び如月がうなずくのを確認してから、鋭空はゆっくり言葉を紡いだ。

「君は森に着く前の事を覚えていないかい？　例えば、どうやって君は言葉を覚えたんだい？　君が住んでいた小屋は誰が建ててくれ

「たんだい？」

如月は目の前がくらりとした。膝の上で両手をぎゅっと握り締める。

「そ、それは……」

「うん？」

「それ、は……分からないの……ごめんなさい……」

如月だって考えなかったわけがない。

自分が一体何者なのか。

気がついたらあの森にいた。言葉も話せたし、小屋もあった。でもその他には何もなかった。身の回りに頼れる人はいなかったし、一番頼れるはずの自分の記憶も、なかった。

記憶がないことの恐怖を、如月は身をもって味わった。

自分が分からない、世界が分からない。どうやって生きていけばいいかも分からない。

大混乱した後、どうにかするしかない、諦めにも似た気持ちが幼い如月の中で生まれた。そして壁にかかっていた数字が規則正しく並んでいる紙から、名前をもらった。身の回りにはそれしか文字がなかった。

如月、と。

如月がぼつりぼつりと話す過去を、鋭空と咲は真剣に聞いていたが、咲がこらえきれない様子で如月に話しかけた。

「如月。この歌を、覚えていない？」

そうして咲はゆっくりした調子の歌を歌いだした。それを歌う咲様は綺麗で、その歌声も綺麗で……。

「如月……？」

夜光の声で、如月ははっとした。

「え、な、何、殿？」

「お前……」
「？」

夜光がそっと手をあげて、如月の目尻から、涙をぬぐってくれた。咲は歌うのをやめた。

「え……？」

頬に手をあてると、涙の筋があった。どうして……。

「今の歌、聞き覚えがあるのか？」

夜光が尋ねた。如月は慌てて言葉を紡いだ。

「え、えと、あの、今の歌聞いて、咲様が綺麗だなんて、思っ
て、歌声も綺麗だなんて思っ
て、それで、すごい、懐かしい
って……思
って……」

如月ははっとして口をつぐんだ。言葉にしてみても初めて気がついた。

そう。如月は懐かしかった。遠くの国の歌なんか、聞いた事ないはずなのに。

咲が優しく如月に問う。

「私達の国にどこよりも美しい桜が咲くのはどうしてかしら、如月？」

「水が、綺麗だから……」

条件反射のように口が答えていた。

鋭空様が息を飲むのが分かる。

如月はますます訳がわからなくなって、怖くなった。

この人たちは、一体何なのだろう……？

無意識のうちに、如月の手は、夜光の着物のすそをぎゅっと握っていた。

九 訪問者（後書き）

鋭空と咲。

彼らが一体何者なのか、もう予測出来ている方も多いでしょうが。次回、明らかになります。

次話もよろしくお願いします。

十 如月の正体（前書き）

更新滞りました、すみません……。
ようやく明かされる鋭空と咲、そして如月の正体

十 如月の正体

「如月が怯えています。そろそろ確認は良いのではないですか？」

夜光にぴたりとくつついて離れない如月を見て、耀映の発した言葉に鋭空はうなずき、如月の事をじっと見つめた。

「単刀直入に言おう。如月、君は私達の娘だ。名前は、佳代」
「人違いだよ」

頭が理解する前に口が動いていた。
少して言われた事を理解してからも、如月は自分の言葉にうなずいた。

そう、私の口が言うとおり、人違いだ。だって、こんな偉い人たちが私なんかと関係があるはずがない。だって、だって……。

「佳代、思い出して。昔、今から十年前も前のこと……」

咲様が身振り手振りをまじえながら、必死で何かを話し出した。
それは、鋭空様と咲様と佳代という少女と彼女の兄にまつわる思い出話で、如月は心の底がざわつくのを感じていた。

それは、知らない。それは、覚えてる。それも覚えてる。それも、それも……。

聞きたくなかった。

何故かは分からない。でも何か、自分がこの人達の娘であると認めてしまったその先にあるものが怖かった。

「思い出さない？ 佳代……」

一通り話し終えて、咲様はさすがのように如月を見た。如月は目を合わせなかった。

「私は、如月だもん……」

精一杯言った言葉に、咲様がどれだけ傷つくか、考える余裕はなかった。

息を吞んで黙ってしまった咲に代わり、鋭空が話し出す。

「如月、混乱するのも無理はないと思う。だが、ようやくここまで私たちは辿り着いたのだ。十年前、お前がたった七歳のころ、隣国の暴動が私達の国にまで影響を及ぼし初めて、それにお前が巻き込まれて姿を消してから、咲と私がどれだけ心を痛めたか……」

如月は昨夜の事を思い出していた。近づいてくる不気味な足音。

かつて、十年前に、私を暖かな幸せからひきはがしたのと同じ足音。

「どんな経緯があつて君がここまで遠い国の森に暮らし始める事になったのかは知らない。だがたまたまこの国の近くに訪れていた私達が昨日の事件を聞いたとき、若い娘が 一人森に住んでいる身寄りのない若い娘が事件に巻き込まれたと聞いて、一縷の望みにか

けてここまで来たのだよ。最初に君を見たとき、心臓が跳ね上がった。確認する必要もないと思った。だって、君は本当に昔の面影をよく残していたから。なあ、如月、本当に、今咲が話した事に覚えはないのかい……？」

「……」

如月は俯いたまま、夜光の袖をかたくなに握った。

鋭空の想いも咲の想いも、痛いほどに伝わってきて　　伝わってくるからこそ、どうしても認められなかった。

自分にまっすぐに向けられるその強い想いを、受け取ることが怖かった。

「如月」

しかし、夜光が静かに如月の名を呼ぶ、その低い声を聞いた途端に、ふと力が抜けた。

それでも顔をあげることはできなかったけれど。

囁くような静かな声で。

「……覚えてる。咲様が言った事、私、覚えてるっ……」

十 如月の正体（後書き）

ようやく思い出されたようで。

果たしてここから、親子、感動の再会っ！

……と、いくのでしょうか笑

次話もよろしくお願いします。

十巻 夜光の決断（前書き）

さて、少し間延びしてしまいましたが、両親が現れた如月の再びの選択の時、そして夜光の決断は……。

十巻 夜光の決断

如月の告白の後、鋭空は茫然自失としてしまい、咲は糸が切れたように泣き崩れて、その場の収束に時間がかかった。ようやく二人が平生通りに振舞えるようになったところで、耀映が口を開いた。

「では、お二人は、如月と、いえ、佳代と再び国にお戻りなられるのですね？」

その言葉に、夜光は自分では理解しがたいような、複雑なわだかまりが自分の中で生まれるのを感じてそつと眉をひそめた。

ようやく親子が出会えたのだから、一緒に暮らすのは当然だ。まして今や、如月の身分は一国の皇女だ。帰るべきだろう。しかし……。

鋭空と咲が期待をこめて、如月を見る。如月はゆらゆらと視線をさまよわせていたが、ちらりと夜光を見上げて、そのすそを握る手に力がこもった。そして、うつむき加減にぼそりと呟く。

「嫌……」

「えっ……？」

鋭空と咲が目に見えてうるたえた。

「佳代……？ 私達と一緒に国に帰って、また一緒に暮らしましょう？ また幸せな、あの頃みたいに……」

甘やかな咲の言葉にも、如月は首を振った。

「嫌だ」

「……どうして？」

咲が胸に手を当てて、大きく息をしながら必死でこらえて、静かに如月に問うた。

整理できない気持ちを言葉にしようと、如月はぎゅっと眉間に皺を寄せながら言葉を紡ぐ。

「……どうして？」……？　だって……だって、この場所は、私の大事な場所だもん」

「佳代……！」

「佳代、私達と暮らそう。さっきも話しただろう？　お前がいなくなつて、私達がどれだけ辛かったか……」

鋭空の言葉にも、如月は必死で首を振っていた。夜光の袖を握るその手には、どんな力がかもつていく。

如月は、自分と別れたくないのだ。

夜光はその事をはつきりと理解した。

如月から目をはなし静かに視線を滑らせると、部屋にあるのは、どんな言葉が如月を動かすのか必死で探す鋭空殿。今にも泣き出してしまいそうな咲殿。

そして、全てを分かった上で、まるで面白がるような色を込めて、ちらりとこちらに視線をよこしたのは、兄上。「どうするんだ？」

そう問いかける、視線。

だから……。

少しだけ膝を如月の方に向けて。

強引に糸を断ち切ったその心の痛みに気付かないように、王弟の仮面を被る。

「きさら……いや、佳代殿」

如月ははつとして殿を見上げた。

夜光の顔には無表情という表情が張り付いていて、その見たこともない夜光の様子に、如月の胸が締めあがる。

さらに夜光は、如月の聞いたことのないような声で話し始めた。

「佳代殿、自分の立場をわきまえられよ。貴女は、一国の皇女。兄君がいらっしゃるだろうから跡取りではないにしろ、貴女にしか成せない多くの事が、貴女の国にある。貴女は自分が成すべきことを、成さねばならない。このような遠い国で、我儘を言っている場合では、ないですよ」

物音一つしない沈黙が、その場を覆った。

やがて、とさりと小さな音がして、如月の手が、夜光の袖から滑り落ちた。

「と、の……？　ねえ、何を言ってるの。難しいこと言わないで。殿が何言ってるのか私、全然……」

呆然と、それでも必死で口元に笑みを浮かべようとしながら如月は言葉を紡いだ。

しかし、夜光は表情を崩さなかった。

「現実をしつかりご覧になってください、佳代殿。私は……」
「……！　私は佳代じゃない！　如月だよ！」

大声をあげて、如月は立ち上がった。目にいっぱい涙を溜めて、零れ落ちるそれを拭いもしないで、夜光の事を睨みつけた。

「どうして殿がそんなこと言っの！？ どうして殿が私の事を佳代殿って呼ぶの！？ どうして、どうして殿が……！！」

夜光は黙って如月を見上げて、何も言わない。表情も変わらない。そんな殿を見て如月は、何がなんだか分からなくなつた。

「この国には奈津がいる。殿もいる。私は絶対にこの国を離れないんだから！！」

乱暴に身を翻して、如月は、部屋から駆け出した。

「佳代……！！」

後ろから咲の声が聞こえてきたが、如月は振り返らなかった。

どうして。どうしてどうして……！！ 殿なら引き止めてくれると思つたのに。殿はきっと、私のこと分かってくれてると思つてたのに！

殿は敬語でしゃべってたから難しくてちゃんと理解することは出来なかったけど、でも、殿は私の事、“佳代殿”って呼んだ……！殿が、殿が……！！ 信じられない！！ どうして殿が。何で……？

……こうなったら意地でもこの国に残つてやる。殿に“如月”として扱ってもらうまで、何が何でもここを動かないんだから……！！

鋭空様と咲様の嬉しそうな顔がちらりと浮かんで如月の良心を苛んだが、如月はすぐにその面影を消した。

十巻 夜光の決断（後書き）

最近如月を泣かせてばかりいるような……。

それでも彼女は強い子ですから、乗り越えていつてくれるはずですよ。

次話もよろしくお願いします。

十式 如月の想いと夜光の想い（前書き）

舞台はいつもの場所へ。

十式 如月の想いと夜光の想い

やれやれ……。

夜光はぼんやりと湖を見つめる如月を見て、木に手をついたまま溜息をついた。

如月が部屋を飛び出したその後、宮の人間総出で、如月の行方を捜している。

鋭空殿と咲殿はショックを隠せない様子だったが、とりあえずまた後日話す約束をして用意した部屋で休んでもらっている。
そして夜光は誰にも知らせずこっそりと、この場所に來たのだ。

如月と出会った場所。

もう一つの月が浮かぶ、この静かな湖へ。

「何をしているんだ？」

そっと呼びかけると、湖のほとり、奈津の墓のそばにうずくまっていた如月はじかれたように夜光のほうを振り返って、とても嬉しそうな顔をした。

「殿っ……」

そのまま如月は立ち上がって夜光のほうへと踏み出しかけたが、ふと顔を歪めるとその場に止まって、くると夜光に背を向けた。
如月の爽やかな青色の着物が濃紺の湖に浮かび上がる。

「何しに来たの？」

如月の声には棘があった。しかし、無理をしているのはばれれば、その声は震えていた。

夜光は放っておくと暴走してしまいそんな心をしっかりと持ち直して、静かに口を開いた。

「みんなお前を探しているんだ」

「……ほつといてよ。関係ないでしょ。私の家はこの森だもん。帰ってきてもおかしくないでしょ。誰にも迷惑かけてないよ」

「……」

夜光が何も言わずにじつと如月の背を見つめていると、動かなかった如月の肩が、震えだした。

「……そうだよ。誰にも迷惑かけてないよ？　なのにどうしてこの国から出ないといけないの？　私はここが好き。この森が好き。殿が好き。ただそれだけなのに。誰にも、何にも迷惑なんかかけてない。そうでしょ？　どうして私が追い出されないといけないの？

私は佳代なんて名前じゃない。私は如月だもん。私は……」

まくし立てていた如月は、背後からふわりと温かくて大きい腕に包みこまれて、驚いて口をつぐんだ。

殿の手は温かい。それに大きくて、いつもいつも如月の事を優しく包み込んでくれる。そんな手だ。如月は少し抵抗するようにもがいたが、やがて体の力を抜いて、殿にもたれかかった。

「如月」

殿の声が、如月の名前を呼ぶ。佳代ではなく、如月の。如月はそれ

だけで胸がいつぱいになって、目の前で組まれた殿の手を、ぎゅつと握った。

「如月。さつきは悪かった。俺の言い方が軽率だった。……俺も、焦ってたんだ」

「焦った……？ 殿が……？」

「ああ」

如月は首をかしげた。あんなに殿は落ち着いていたのに。どこが焦っていたのだろう。

「どうして……？」

如月の問いに、夜光は一瞬言葉を詰まらせたが、そつと腕に力をこめた。

「お前が、知らないところに行ってしまうから」

「え……？」

「さつきも言ったとおり、お前は、自分の国に戻るべきだ。ちゃんと戻って、自分のやるべきことをやらなければならない。そういう立場の人間なんだ」

「殿……！」

如月が腕の中で身をよじったが、夜光は腕の力を抜かなかった。

「そうしなければならぬ。俺は、そう思った。だから無理してお前との関係を断ち切ろうとした。お前への感情を一切絶とうとした。それで焦って、あんな言いかたをしてしまったんだ」

「で、でも、殿……」

「悪かった、如月」

謝らないで。

如月は心の中で叫んだ。

謝らないでよ、殿……っ。

そうやって謝って、そのあとに“でも、だから、お前は帰れ”だなんて、言わないで……。

「如月」

「き、聞きたくないっ」

如月は夜光の腕の中で必死で首を横に振った。

「聞かないよ。私はこの森に住むの。そうやって決めたの！ 私の場所はこの森とっ……この、森と……」

胸がきゅうつとしまるような気がする。言葉が出てこない。

こんなに、こんなに、殿への思いは如月の中で溢れているのに。

如月の頬を涙が伝い、夜光の腕をつかむその細い腕にはさらに力がこもる。

夜光は黙ってそんな彼女を見つめる。

やがて溜息をつくかのような細かい声で如月は続きを紡いだ。

「この森と……殿の……となりだもんっ……」

夜光はそつと溜息をついた。

「如月……」

「と、殿にとつては迷惑、だと、思うよ。 そんなの分かってるの。でも、わ、私にはそれしか、それだけしかないっ。だから」

「鋭空殿と咲殿は？ お前の事をずつと探して探して、ようやく見つけたお前の両親は？ あの方たちはお前の事を確かに大事にしてくれるだろう」

「でも……」

穏やかに笑う鋭空様。華やかな雰囲気をもった咲様。

私の、お父さんと、お母さん……。

如月のために、心を痛めて。咲様はあんなに取り乱して。こんなにも如月を求めてくれる人は今までにいなかった。

如月の瞳が揺れる。

「帰ってさしあげろ、如月。何も一生俺と会えないわけじゃない」「で、でもっ」

「お前はまだ広い世界を知らないだろう？ 一度この名月ノ国から出て世界を見てみるのもいいものだ。たくさん楽しいこと、面白い

ことがある。それで……そうして見た心躍るような出来事を、俺に教えてくれ」

「殿、に……」

「ああ」

「私は……帰ってきてもいいの……？」

殿はゆっくり笑って、腕の中の如月の頭をわしゃわしゃ撫でた。

「何を今更言っているんだ。お前の場所は、ここにはちゃんとあるだろう」

「でも、森の小屋は、もう……」

「この泉が、ある」

夜光の声はいつものように低く、落ち着いていて……。

如月は相変わらず静かなその泉を見つめた。

「……月の、泉……」

「ここは俺とお前が出会った大切な場所だ」

殿と出会った時と同じ、半分欠けた月が揺らめく泉。

如月の心のように波打つこともなく、ただひたすらに静かな泉。

ここが、私の場所……殿との大切な、私の。

「……うん」

「大事な場所は気持ち一つでいつでも自分の場所になる。如月も、ここを自分の場所にしたらいい。そうしたら、ちゃんと帰ってこれるだろう？」

「……うん」

「そんな場所を、鋭空殿達と帰った国でも見つけるんだ。それでお前の場所を増やすしたらいい。そうしたらお前はどこにいても迷

子にならない。ちゃんと自分の場所が、あるんだからな」

自分の場所。自分の故郷。

それは一つだけじゃなくてもいいのだ。

いくつもの自分も自分の場所を作って、その一つ一つを大切にしていけばいい。

この国では如月の場所が、故国では、佳代の場所が。それぞれあつてかまわない。

きつとどこにあつてもそこは、素敵な場所に違いないのだから。

……そして、そこは、帰る場所になるのだから。

「……うん。そうだね、殿……。私は、殿の傍に、帰ってくる場所があるんだね……」

「ああ」

小さく震える如月の肩を、夜光はさすつてやった。

「殿が、私の帰る場所になつてくれるんだね……」

「ああ」

「……本当に？」

「本当に」

「迷惑なんかじゃない……？」

夜光はかすかに笑った。

「くどいぞ、如月。当たり前だろう」

「……うん……うんっ……。ありがとう、殿っ……」

如月は殿の腕をぎゅっと掴んで、またこぼれそうになる涙を必死でこらえていた。

今日はたくさん涙を流しすぎた。嬉しいのだから、泣かない。

笑って、未来に向かって、踏み出そう。

如月のしがみつく大きな夜光の腕はやっぱり頼もしくて。

如月はこうして今いられることに限りない幸せを感じていた。

十式 如月の想いと夜光の想い（後書き）

帰ることにした如月。

葉華国は果たしてどんなところなのか。

次話もよろしく願います。

十参 故郷、葉華国にて（前書き）

前回でひと段落、今回からは第二幕の始まりです。

十参 故郷、葉華国にて

「佳代？ いるか？」

部屋の外から響いた兄の穏やかな声に、訪問記録をつけていた如月はふと顔をあげた。

城の隅っこ、一方が庭に面していて、小さな机と本棚だけが置かれた質素な如月の部屋。開け放たれた縁側からさらさらと風が吹き込んでくる。

そよ風の気持ちいい季節。如月のいる葉華国では厳しい暑さもようやく和らぎ、爽やかな午後、晴天が高く高く、広がっていた。

一つ大きく伸びをしてから居住まいを正すと、部屋の隅に控えている側近の琴音が音も無く、襖を開けてくれる。そして如月の 佳代たかさとの兄、堯郷が如月の部屋へと入ってきた。

「お、訪問記録か。佳代は偉いなあ」

どしどしと歩いてきて如月の手元を覗き込んで感心する堯郷を見上げて、如月は微笑んだ。

「いえ、このぐらいは。兄上、どうかしましたか？」

まだまだきこちなさは残るものの、如月もようやく敬語を使えるようになっていた。

「いや。ちょっとお前に聞きたいことがあってな……」

言いながら堯郷はどっかりと如月の隣に腰を下ろした。

堯郷はがっしりとした体格で背も高い、如月より五つ年上の兄だ。夜光が月のような静けさをもっているとするならば、堯郷はさしずめ、春の木漏れ日のような暖かさを持った人だ。

如月は咲に似て、堯郷は父に似ている。

久々に国に戻った如月に自然に接しながら優しくしてくれるこの兄が、如月はすぐに好きになった。

「聞きたいこと？　なんででしょう？」

「“緑清紅”に空き家はないか？　結婚を機に新しい家が欲しいという若夫婦がいてな……」

如月は顎に手をあてて首をかしげた。

「“緑清紅”、ですか……少し待っててくださいね。琴音、手伝って」

「もちろん」

そうして如月は立ち上がると、琴音と共に、たくさんの半紙を綺麗に整理してある棚に向かった。

如月が葉華国に来て、二ヶ月が過ぎようとしていた。

如月、もとい佳代の生還は大いに国内でもはやされ、誰もが行方不明のままだった姫の帰還を喜び、あちらこちらで祭りが行われた。ほとんど思い出せないものの、自分の部屋を見た時の懐かしい感覚、兄との対面。

遅ればせながら一国の皇女としての教育を受けつつ、様々なことが目まぐるしく動いていく中で、帰ったばかりの頃は断片的に甦ってくるだけだった記憶も、一ヶ月も国で過ごして様々なものを見るにつけて、ほとんど完璧な形を成すようになっていた。

そうして二ヶ月が経ち、ようやく生活が落ち着いていた頃、如月はずっと考え続けていたことを実行することにした。

故郷に来てからも、一時も忘れることのなかった夜光の言葉

「忘れ物はないか、如月」

「うん、大丈夫。もともと持ち物なんてほとんどないし、小屋と一緒にに焼けちゃったから。それより、これ……本当にもらっていいの？」

如月が葉華国へと発つ日。馬車の前で如月が夜光に差し出したのは、昨晩夜光が如月に贈った、青い花をかたどった髪飾りだった。嬉しそうに、それでも少し後ろめたそうに問う如月に、夜光はいつものように少しだけ口元に笑みを浮かべた。

「ああ。餞別だ」

「そつか……ありがとう、殿。これ、なんていう花？」

「それは……“雪姫”だ」

「ゆきひめ……？」

「ああ。雪が降り積もると、その雪の間から一輪だけ、ふと顔を出す花だ。滅多に見られないが、それは美しい花だぞ。……お前に似ていると思ってな」

ぼそりと付け足された夜光の最後の言葉に、如月はっこりと微笑んだ。

「佳代。そろそろ行きましょう」

咲が馬車の中から美しい声で如月を呼ぶ。

「うん。すぐ行くよ、咲様。じゃあね、殿。元気でね」

「ああ。お前も。前も言ったが、如月の国では、如月にしか成せないことがあるはずだ。……しつかりな」

「うんっ、頑張るよっ」

元気いっぱい如月の返事に夜光は一度だけその頭にぽんっと手を乗せると、そつとその背を押した。

そうして如月は、鋭空に手伝ってもらって馬車に乗り込み、名月ノ国を後にした。

私にしか成せないこと……。まだちゃんとした答えは見つからないけど、出来る事からやってみるよ、殿。
そう心に決めて、如月が始めたのは、国民の訪問だった。

葉華国はそんなに大きな国ではない。

楕円形に近い国土を斜めに四分割にする形で地域が分かれており、その交差点に如月の家でありこの国の城である“桃華ノ宮”が建っている。

北は“寒風”かんなぎ、東は“萌”もえ、南は“群風”ぐんふう、そして西は“緑清紅”りょくせいこうと言

い、一年の中で気候と気温の移り変わりがくつきりと出るこの葉華国らしく、地域名に使われているのはそれぞれの時期に咲き誇る花の名だ。

地域に住んでいる国民はどこも大体二百人前後。如月の住む“桃華ノ宮”も、夜光が住んでいた“星ノ宮”と同等か、それよりなお小さいくらいだ。

このような小国が国として生き抜いてこられたのには、もちろん理由がある。

このあたり一帯には葉華国と似たような規模の国が葉華国も含め六つほどが集まり、六国の中では最大の軍事力を有し、大国ともそれなりのつながりを持つリーダー格の水深国を中心とした“花鳥風月”と呼ばれる横のつながりをもって、互いの国を守っているのだ。

そして葉華国がそんな小国だからこそ、如月の国民訪問は可能になった。

馬の乗り方を習い、琴音だけを連れて、如月は民の一人一人を訪問し始めた。

何か困っていることはないか、最近気になっていることはないか、そんなことを聞いて回った。

国政で忙しい父や兄、そしてあまりに優雅な母には出来ない、野育ちの如月だから成せること。

国民もそんな如月に親しみを感じて、快く話をしてくれる。周囲で起こった事件から、軒先の世間話程度の話しまで。

如月も、人々と触れ合えるそんな時間が好きだった。

最初のほうはいい顔をしなかった鋭空や咲も、如月の訪問によつて浮かび上がってくる数々の国の内情を知る事が出来るのは実際に役に立つことだと気づき、今では如月の事を支えてくれている。

「緑清紅の記録はここかなつと……」

背伸びをして紙束を降ろすと、如月は十日ごとにきれいに冊子にして綴じてある記録をぱらぱらとめくりだした。

「緑清紅はお年寄りが多いから、よく尋ねるんです。えーっと……空き家、空き家……」

如月の隣では琴音も同じように資料を調べる。そんな彼女の手がふと止まった。

「如月様、この山の麓、この一帯は人口の過疎化が進行していたところでございます。これ以上孤立させるのは危険です。ここなどはいかがでしょう」

如月は手にしていた紙束を琴音に預け、代わりに彼女が差し出した資料を受け取って目を走らせる。

「なるほど……確かにそうかも」

「ん？ どこだどこだ。見せてくれ」

興味深そうに覗き込む堯郷に、如月はその地区の説明をし始めた。

地形、人口、平均年齢、財政状況……。

堯郷は熱心に聞きながら時々持参の紙に何かを書き付ける。

やがて二人で話し合って、どの辺りに家をあてがうか、また、進行する過疎化への対応策なども軽く話し、空が真っ赤に染まった後、濃紺に包まれるころになって、ようやく堯郷は時間の流れに気づいたように慌てて腰をあげた。

「すまない、如月。つつい話し込んでしまつて……。お前の意見は面白いものが多いからな」

「いえ、兄上。私も役に立たなければ、何のために帰ってきたのか分かりませんから」

微笑んで応えて、兄を見送るために如月も立ち上がる。

「あまり無理をしないで」

「ああ。お前もな。あ、そういえば……」

思い出したように堯郷は手を打った。如月は首をかしげる。

「？」

「近々、お前の帰国祝いに水深国の姫君、鈴風殿がお見えになるそうだ……。覚えているか？」

「すず……なぜ……？」

大体の事は思い出したはず……。だが、鈴風……。あまりぴんと来ない名前だ。

眉間に皺を寄せる如月の頭をぐりぐりとなでて、堯郷は笑った。

「覚えてなくても無理はない。お前もたった六歳ぐらいの時にお会いして以来だからな。その時は、お前より三つ上で九歳だった鈴風殿が“花鳥風月”を巡ってらっしゃっていてな、この国にも何日か滞在なさったんだ。お前はまるで姉のように鈴風殿をお慕いしていたし、鈴風殿もお前のことを可愛がってくださっていたんだぞ。鈴風殿がお帰りになれる日にお前は泣いて泣いて……」

懐かしそうに堯郷が話す思い出話に如月は手を胸の前で組みながら、胸が熱くなるのを感じていた。

「そんなことがあったのですか……。それで、その鈴風様が今度来るのですね！」

「ああ。楽しみにしておけ」

「はいっ」

如月は満面の笑みで応えた。

かつて如月が姉のように慕った人……。会うのがとても楽しみだった。

十参 故郷、葉華国にて（後書き）

突然の時間経過、すみません笑

ちなみにそれぞれの地域名に使われていた花は私達の世界で言う

寒風 椿 冬

萌 梅 春

サルスベリ

群風 百日紅 夏

緑清紅 紅葉 秋

のようなものです。

ちなみに、雪姫はジオラです。

次回もものすごい勢いで時間経過します。

次話もよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2389w/>

雲の上の世界

2011年11月11日02時44分発行